

Title	標註古風土記(常陸)(栗田寛著, 後藤藏四郎補註)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.165- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0166">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0166</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の熱烈なる人間的認識の要求のために、神を奉齋すべき家柄に生れながらしかも神を認容することが出来ず、自然科學を棄て、心理學を求めたのであるが、これにも（當時の）満足できず疑惑を抱き煩悶を重ね遂に心理學を實踐的認識の方法によつて確立した人である（城戸氏叙文）それだけに文化の個性とその解釋に於ても特徴があると同時に缺點も亦あらうと思ふ（例へば氏の所謂 Modus はアプリオリに與へられたものであつて、それを規定する基準は何等存しない。高天原さいふ一つの表象内容は、古代日本人にまつては天つ神たちの神つごひにつごひをる天上の場所であるそこには彼等の世界觀——自然哲學——の特殊の Modus があるのである、この Modus に於いては高天原は神々の住所として最も現實的な生きた意味形態なのである、さいはれるが、この特殊な Modus の標準は何であらうか、又この Modus に於いては高天原は神々の住所として最も現實的な生きた意味形態なのであると云ふ事も不明瞭である）。

この方面に興味を持たれる大方に一讀をおすすめる次第である。（四六版本文四一九頁、定價二圓八拾錢、淺草區北仲町二番地故文學士今井貢遺稿刊行會（淺子勝二郎））

### 校定出雲國風土記

（島根縣皇典講究分所編纂）

出雲風土記の從來の傳本に誤謬多きを慨し、出雲大社々務所内島根縣皇典講究分所においては、大正十年以來その研究會を起し、

二十數種の本を蒐集し、校訂に従事し、前後八年を費して本書を編纂した。解題索引を附し、別に天平時代の出雲國想像圖を附してをる。

記紀が中央所傳に偏したるに對し、風土記は、地方の所傳を採録し、古代の神話信仰習俗を理解するために無盡の資料を呈供してくれることは云ふまでもない。然るに此古典の研究が從來あまりに等閑視され、嚴密な校勘も行はれてゐなかつたことは遺憾であつた。今やその中の出雲國風土記だけでも同地方居住の篤學者の手により校定出版せられたことは悦びに堪えない。かの民俗學上の大問題であり、折口教授によりその名篇「水の女」中に取扱はれた三津郷の條「其津の水沼於（？）而、御身沐浴ぎ坐しき」も「其澤水治於而、御身沐浴坐」となつてをる。次の行の「其水沼出而用ひ初むるなり」も「其水汲出而用初也」となつてをる。校定の結果をもつてたゞちに絶對的に眞なりと見ることには出来ないが各異本の異同を上欄に標記してをるから研究者にまつて取捨撰擇上至極便利である。古代研究に従事する諸彦の是非一本を座右に備へられんことを希望する。（和本半紙版特製本金貳圓普通本金一圓二十錢送料金六錢）（松本信廣）

### 標註古風土記（常陸）

（栗田寛著 後藤藏四郎補註）

栗田氏の標註古風土記が、同書の研究者に重んぜられてをることには云ふまでもないが最近その價ひが漸く不廉であり、世人は、そ

の翻刻を翹望してをつた。今大岡山書店の手によつてその一部常陸風土記が重刻された。附圖あり、読み下しあり、索引あり、風土記研究者にさり、便利此上もない。殊に出雲國風土記考證の著者として知られる後藤藏四郎氏が補註されてゐるのも讀者を裨益する。たゞし風土記の難解さはまだく同氏の註釋によつて解決しつくされてゐない。將來國文學研究に従事せられる人々の一層の努力を期待する。

なほ本書について欲をいへば今少し活字を大きくし、また風土記全部の復刻をしていただきたいかつた。現在では本書を購入すること共になほ標註古風土記の初版を求める必要があるのは遺憾である。吾人は、書店の續いて續編を刊行せられんことを切望する。同書店が毎度かゝる非營利的の書を出版せられる努力は感謝に堪えぬ所である。(松本信廣)

## 茶 道

(高橋 龍雄著)  
大岡山書店發行

茶道の我が國文化史上重要な地位にある事は今更ら記す迄も無い。この茶道並に茶道史の權威たる高橋龍雄教授の近著「茶道」は國史及び茶書、記録類を弘く涉獵して、我が國文化史の立場より、この道を明解に略述せられたもので、最近に於て余の興味覺えて通讀したもの一である。内容の大綱を掲げる。

總説―茶の歴史―茶道の成立―英雄の茶―茶會―懷石―茶室と  
茶庭―掛物―花入―茶入―茶碗―拜見を請ふ茶器―茶人系譜及

び流派―結論  
余は本書に據りて種々教示を得たが、就中「英雄の茶」中左の記事は感激を以て再讀した。

明智光春も、その最期に臨んで、名物茶器を槍の先に附けて秀吉軍に渡したのだ、戰國の武將も、名器を尊重することは、決して忘れなかつたのである。

右の名物茶器は、今日水戸公爵家に傳存の「新田肩衝」等のことであらうが、この光春の精神は我が武士道の一面で、荒魂に對する和魂までも稱すべきものであらう。これに就て思ひ出す事は、既に御承知かも知れぬが、かの函館戰爭中、五稜郭内に籠城の榎本武揚は、防戦の力盡き、其の落城の旦夕に迫るを覺悟し、曾て自分が遠く和蘭に留學の節、其の恩師 Theodore Ortolan より受業の節親しく贈られた寫本 *International regales en diplomatie der Zee* 二冊(當時萬國海律全書と約され、航海法に關する唯一參考書であつた。)の落城と共に失はれるは、國家の爲に忍びないことを態々使者を以て同書を官軍の陣中に贈り其の由來を附して保存を請うた。官軍の將黒田清隆も其の意を喜び、其の謝禮として清酒一樽を陣中見舞として贈つた。後幾星霜を経て、武揚が廟堂にありし日、會々同書を官庫の一隅に發見し、懷舊の情禁じ難く、遂に官許を得て再び愛藏する事となつた。武揚没後、同書は其の子孫武英氏より前記の由來を附して帝室に献上せられた。筆者が幸に同書を一見し其の由來を知つて武揚の精神に感激した。今、高橋教授の著書によりて更に光春の逸事を教へられ、彼此合せて、其の武士的精神には滿腔の敬意を表せざるを得ない。